



休刊のご挨拶

三上 八郎 (五個荘出身)

五年間、計十回発行してきたこの会報も、今回で休刊のやむなきに至りました。長い間のご愛読、ご寄稿に感謝申しあげます。

この際、主な記事とその号数をまとめてみましたので、バックナンバーをご所望の場合には、号数を指定の上、ご遠慮なくお申し越しください。

- 久田二郎 (永源寺出身) 「近江恋々」①～④
- 細野豪志 (近江八幡出身) 「湖水と湧水」①
- 平田文一 (近江八幡出身) 「老年暴走族だより」①～⑩
- 小西伸武 (近江八幡出身) 「ほやなあ」③
- 奥居重彦 (彦根出身) 「琵琶湖へ漕ぎ出る」④
- 伊藤正 (安土出身) 「近江そして・・・」③～⑩
- 室岡好子 (余呉出身) 「消えた故郷、消えぬ思い出」⑤
- 久田二郎 「思い出す事」⑤
- 鈴木房子 (木ノ本出身) 『プラットホーム』での別れ」⑥
- 山中島好子 (石山出身) 「思い出の石山寺」⑦
- 大橋勝 (彦根出身) 「わが誇りー細野環境・原発担当大臣」⑦
- 細野豪志 「強い決意で」⑦
- 山中利之 (日野出身) 「ふるさと『近江日野』を慕う」⑧
- 佐々真由美 (八日市出身) 「望郷」⑨
- 東郷武男 (近江八幡出身) 「故郷礼賛」⑨～⑩
- 近江の名句・名歌 ①～⑩
- 滋賀の味 ①～⑩
- 湖国奇談 ①～③
- 滋賀県の文化施設 ③～⑩
- 近江商人余話 ⑤～⑨

時は容赦なく移り、歴史に繰り込まれていきます。

私事ながら滋賀県五個荘の私の実家も、昨春秋、取り壊して更地になりました。

わが家は没落した近江商人ですが、建物は一八五九年(安政六年)、土蔵は一八二〇年(文政三年)に出来たものです。

滋賀大学経済学部附属史料館、および東近江市の近江商人博物館に寄託した帳簿等の文書資料は数百点、燭台から矢立に至る遺物も百数十点に上りました。

隆盛を極めた商家の資料よりも、番付け幕尻に甘んじたわが家から出る商人資料などの方が、庶民経済史研究にとっては格段に高い価値が在るのだそう、引き取りに来られた研究者の目の色が変わっていた、というのも皮肉なお話です。

故郷礼賛（その2）

東郷 武男（近江八幡出身）



もともと近江八幡にはこれといった産業がなくて、商業が盛んになった。東京、大阪、京都と商売にでかけるのである。近隣の日野町、五箇荘町もそのようで、八幡商人、日野商人と一応区別されていたが合わせて近江商人として「三方良し」の精神で活躍した。八幡町では西川利右衛門、伴傳兵衛らが有名で、西川家は現在「ふとんの西川」として、寝具を全国展開している。

これらの人とは別に八幡町の発展に寄与した人として米国人の「ウイリアム・メレル・ボウリス」氏が挙げられる。明治36年八幡商業学校（現在の八幡商業高等学校）の建築設計士として来幡、後に同校の英語教師にもなり、その後日本人の一柳満喜子と結婚、日本名を「一柳米来留 イチヤナギメレル」として医療、教育に熱心に取り組み「近江兄弟社」を設立、傷薬の「メンソレータム」を製造、販売、また病院、幼稚園、学校を経営。町のあちこちに洋館を建設、町の景観として保存されている。

町の北側の八幡山麓に八幡公園があって、ブランコなどの遊具、猿や鳥類もいて町民の憩いの場所があった。桜の木が多く桜の名所にもなっていた。桜といえば3月には湖東に春を呼ぶ「左義長まつり」がある。全国的には正月15日前後に、正月の松飾やしめ縄を集めて焼く火祭りの行事としてある。

近江八幡の左義長まつりも江戸時代には1月14日、15日に行われていたようだが明治時代にはいい、太陽暦の採用に伴い3月に変更され、昭和40年代からは3月14日・15日に近い土、日曜に開催されるようになった。元来、近江八幡の左義長は安土城下で行われていたもので、城主の織田信長自らも踊り出たと伝えられているが、織田信長亡き後、八幡山城下に移住してきた人々は、既に4月に行われていた「八幡まつり」参加を申し入れたが、松明の奉納場所がなく、また新参者とのことで断られたため、これに對して安土で行われていた「左義長まつり」を始めたのが起源とも伝えられている。左義長は松明、ダシ、赤紙（12月を表す）の3つの部分を1基とし、前後に棒を通し、釣り縄で括り固め神輿の様に担ぐように作る。（これ全体を左義長と呼ぶ）特にダシは町内の人々の手作りにより、約2カ月かけてその年の干支に因んだものをテーマとし決めて制作されるが、その素材は穀物（大豆、黒豆、小豆、ゴマ、等）や海産物（鰹節、昆布、するめ、干魚、等）食物を使い、その素材の色を活かして作りあげることが大きな特徴で手間がかかる。この左義長を皆で担ぎ「チョウヤレ、チョウサダ」の掛け声とともに拍子木を打ち練り歩き、二日目の夜には比牟礼八幡宮の馬場で燃やす火祭りである。担ぐ人の装いが変わっていて、女性の長襦袢を着て顔にはお白粉を塗り女装をする。これは織田信長が左義長まつりに出た時に身分を隠すために女装したのでこのようになったらしい。現在は町内毎に揃いの法被になっているようである。

4月になると「八幡まつり」別名「太鼓祭、松明祭」と言われる祭がある。1日目は八幡宮の馬場に葦、菜種殻、笹で作った高さ10メートルにも及ぶ松明を7〜8本建て、夜になるとこれを順次燃やす。町内によつては燃やしながらか建てたり、小さな松明を手で抱え振りながら燃やす「振り松明」、燃やしながらか引きずって歩く「ひきずり松明」もある。翌日には直径2メートルにも及ぶ大きな太鼓を打ち鳴らしながら、「ドッコイサノセ」の掛け声ともに練り歩くゆったりとした祭である。

この頃になると「もろこ」（体調7〜8センチの細い魚）釣りに出掛ける。朝早く起き自

転車で30〜40分走り円山の湖岸に行く。陸続きの葦州に入り、さし虫を餌に糸を垂らし、ポイントに当れば面白いように釣れた。これをさつと焼き酢味噌を付け食べる、美味この上なし。「もろこ」も今は高級魚となっていてなかなか手に入らないらしい。

円山周辺は葦州が多く、水路が網の目のようにありここを手漕ぎの舟で巡る「近江八景水郷めぐり」がある。機会があつて乗船したが完全なアナログの世界で、耳に入るのは「ギイギイ」という音と、時折「かいつむり」（琵琶湖に生息する水鳥の1種）の鳴き声、案内の船頭の声のみの別世界に入った感じで、心が洗われたようで感銘を受けた。また行きたいと思っている。

夏になると「しじみ」採りによくいった。同年位の友達と歩いて40〜50分の牧町の湖岸に行き、水位が首までのところで足先で貝を探り素潜りで採る。湖底は砂地で親指位の大きさの蜆が1もぐりで3、4個は採れる。これを繰り返し袋に入れ持ち帰る。結構面白く競争したりして遊んだ。夕方になると「行水」に入る。大きい盥を庭に出し湯を入れ入浴する。終わると浴衣に着替え表に縁台を出して涼む。この時に友達と将棋に興じる。本将棋を覚えたのがこの時であつた。

この頃になるとあちこちで「盆踊り」が始まる。勿論江州音頭で、私共の方では桜川梅勇一座が有名だつた。夜になると音頭の開催されている町に出かけよく踊つた。これとは別に一度「座敷音頭」を聞く機会があつたがこれも良かった。（座敷音頭Ⅱ雨の日にお寺の本堂など座敷で音頭を聞く）

8月中旬になると「地蔵盆」がある。町内にあるお地蔵さんを洗い清めて一か所に集め、飾り付けをして1日中子供達で賑やかに見守り供養する。各家からはお供え物があり2日目の午後にせり市で地蔵盆の費用を賄う様で、お菓子などは子供たちに分配される。これが楽しみで地蔵盆に参加したものである。

ふるさとは遠きにありて思ふもの

そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土いとの乞食かたろとなるとても

帰るところにあるまじや

ひとり都のゆふぐれに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

室生犀星

(おわり)

老年暴走族だより



〔X 卒業〕

平田 文一（近江八幡出身）

東京で運転免許を取得して来年で六十年、「老年暴走族」の看板を下ろす時期が、近づいてきたのを感じます。

この一月、運転免許更新の為の後期高齢者講習を受けて来ました。まず予備検査(認知機能検査)から始まりました。結果は六十歳以下の運転者と比較した場合、五段階評価でそれぞれの項目が二〜四ポイントでした。同年齢者と比較した場合は三〜五ポイントになり、本検査も無事終わって最後に受講終了証明書を頂きましたので、誕生日までに更新センターに行けば、以後三年間はドライブが楽しめます。これからは無理をせず、余裕を持って走るよう心がけたいと思っています。

これまで、四十七都道府県中三十二の都府県へ車で行く事が出来、それぞれの地方で良き思い出をつくる事が出来ました。車では行かなかった他の十五道県へも、ツアー旅行などで十四道県へ行っていますので、足跡を残していないのは宮崎県のみになりました。

ぜひ次の機会をとらえて、全国制覇を達成したいと思っています。

最近車で走る回数は減り気味ですが、それでも年間一万キロ強は走っていますので、同年配の方々よりは多いのではないのでしょうか。家内も昨年末で仕事を辞めましたので、これからは週末に限らず平日に行動出来ます。花の咲く頃、果実の実る頃に出掛けたいと企んでいます。

滋賀には高校卒業以来、必ず年一回は帰っていました。良い所、知らない所もまだまだあります。

体調が許す限り訪ねたいのは、やはり懐かしい郷里滋賀県です。

(完)

近江の味

⑩

「鮒鮓」
ふなずし



本欄も「日野菜漬」から始まって「赤こんにやく」「丁字麩」「丁稚ようかん」「赤蕪漬」「ゴリの佃煮」「小鮎の佃煮」「近江牛」「鴨すき」を経て、大本命の「鮒鮓」にたどり着きました。しかし皆さんに今さら鮒鮓の説明は不要でしょうから、エピソードを一つご紹介しましょう。

県人会をかつて遠州支部と合同でやった時、浜松の大岡敏孝さんが私の隣りに座って、滋賀県で鮒鮓を買うのはどこがいいだろうか、という質問を受けました。

私は間違いないのは五個荘の「納屋孫」だと答え、「少し値は張るが」と付け加えました。

それから暫くして五個荘からの電話で、彼が実際にその店へ鮒鮓を買いに行ったことを知り、その素早い実行力に感服しました。

その「実行の人」大岡氏は、昨年十二月の総選挙で滋賀県一区から出馬し、衆議院議員に初当選しました。わが静岡滋賀県人会は、二人の国会議員を産んだことになりました。

近江そして・・・ ―― 伊藤 正 (安土出身)

静岡を去って「近江そして」より「静岡そして」の感の内容のような気がしている・・・
近江商人や滋賀県人の県民性については、いろいろ言われている。静岡県については？
人気マンガのちびまる子ちゃんに代表されると言われることもあるが、静岡県はご承知の

ように、東西に長く、例えば国道1号線は三分の一が、新幹線には熱海、三島、新富士、静岡、掛川、浜松と6駅がある（東北新幹線が延長されるまでは最多であったが現在は岩手県が7駅と一駅多い）。もともと伊豆、駿河、遠江の三国に分れていて、気質も異なる。三地域の人間性を表す言葉に「伊豆餓死、駿河乞食、遠州泥棒」があると聞くが、これもしも食べ物がなくなつた場合の対処方法のたとえだそうである。確かに気性は県内を西に行くほどやや荒くなるようである。これはあくまで県内の比較であつて、総じて温暖な気候と、その結果による豊富な農産物や海産物など恵まれた環境のもと温和で優しい。考えるに、静岡県は駿河湾―遠州灘と海に面し、反対側は山が迫っていて、塩の道等はあるが、東海道の線（1次元）がメインである。一方、滋賀県は、気候は静岡に比べると厳しいが、都の京に近く交通の要所であり、琵琶湖を介してまた四方の山々から日本各地へと面（2次元）で拡がっていると考えられる。かようなことも、長い歴史を通して培われる人間性に、何らかの影響が有つたのではないだろうか？

浜松に来て2年目の春、古い社宅の、これまた古く風呂場の中にがす釜があるタイプの風呂で、漏れていたガスに引火し、全身の大火傷を負つたことがあつた。約一ヶ月の入院とその後の静養の間の遠州の方々の親切は忘れることができない。近くの飲み屋さんさんが、土日も営業していること、キープしたボトルについても一応期限は書いてあるものの、どれだけ延びようとして残していかれること（この点については、期限を越えることはあまり無かつたかもしれない）など、大阪地区では考えられないことである。地方の銘酒が手に入ったからと持ち込んでok、「幾らか払います」と言つても「そんなのいりません」と優しい声が返ってくる。

良い話ばかりではなく、こんなこともあつた。県人会会員の動向についてである。

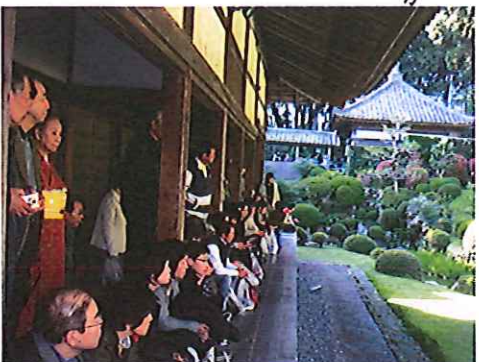
第四回遠州支部の会合を近江彦根藩

ゆかりの竜譚寺で行つた際、日本生命浜松支店の支店長に赴任してきたK氏が滋賀県出身とのことで入会し参加してくれた。翌年は、都合で不参加の返事があつたが、翌々年は宛先不明で案内状が戻つてきた。当時県人会は年会費を集めていて、最初の年は頂いている。その後年会費徴収は中止となり、集めていた会費も返却することになった。

K支店長の転勤は判つていたので、県人会の会費の返却のため転勤先を

教えてもらおうと事情を話しお願いをしたが、プライバシーが関係することは分るが、会社の体質か？電話を受けた女性の性格か？けんもほろろにnoの返事であつた。

その後大阪勤務になり、時々昼休みに顔を見せる大阪の日本生命のお嬢さんに事情を話すと、「大丈夫です」の一言で夕方電話で名古屋の支店に勤務していることが分り、最後の懸案であつた金銭面も解決し、遠州支部長の役目は終わった。彼女の出身を聞くと岡山とのこと。その後、彼女の美貌に負けたわけではないが、貯蓄型保険を契約させられることになつてしまった。リクルートは、滋賀や静岡ではなく、岡山がベターなのか？





たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり まみず くら かわのゆうこ
河野裕子

現代女流歌人の第一人者であった裕子は、六歳から父の仕事の関係で甲賀郡石部町に住んだが、大学卒業後しばらくは、日野東中学の国語教師をした。晩年は乳がんと闘いながらも、平成二十年からは宮中歌会始詠進歌の選者を務めた。左は、二〇一〇年彼女が六十六歳で亡くなったときの、皇后の御歌。

いち人の多き不在か俳壇に歌壇に河野裕子しのぶ歌 美智子

滋賀県の文化施設 8

巖谷一六・小波記念室



「ふじは日本一の山」の童謡の作者で、日本のアンデルセンと呼ばれ、わが国児童文学の創始者とされる巖谷小波いわやさざなみは、静岡県には格別に縁が深いですが、実は滋賀県出身であることは素外知られていない。巖谷家は代々、近江水口藩の藩医であった。

- ☆ 滋賀県甲賀市水口町水口五六三八
- ☆ 「甲賀市水口歴史民俗資料館」に併設
- ☆ JR草津線「貴生川駅」より、近江鉄道に乗り換え「水口城南駅」下車すぐ
- ☆ 新名神高速「甲賀土山IC」、または「甲南IC」から各約一五分
- ☆ 一〇・〇〇〇ー一七・〇〇〇 木・金曜休館
- ☆ 料金 一五〇円
- ☆ お問い合わせ 0748-62-7141



次回例会予告

日時 二〇一三年九月八日(日) 一二時三〇分より
会場 三島市民文化会館 二階和室
会費 二〇〇〇円

滋賀県にゆかりのあるお知り合いをご紹介ください